文化情報学部終了にあたって

文化情報学科　観光情報コース～観光サービスコースを中心に

福　永　　昭

1. 観光情報コースの誕生

1994年4月に文化情報学部が開設された。情報は資源であり、人類の共有財産として、未来に伝えるべき価値を持っているとの理念の下に、文化情報学部は、音楽映像情報、景観観光情報、知識基盤情報、記録管理情報の研究分野が設定された。

その根拠は、情報を、文字性と非文字性、さらに、複製可能性と複製不可能性、という4つの軸に分けたことによる。「文字性と非複製性の象限には記録(口承、筆記)、文字性と複製性の象限には印刷（書籍、新聞)、非文字性と非複製性の象限には景観（自然、人工)、美術・演劇などの芸術作品、博物、非文字性と複製性の象限には映像（写真、映画、テレビ、レコードなど)」[1)] の4つに分類した。

それら4つの研究分野に対応して、映像情報コースと観光情報コース、および、知識コミュニケーションコースとレコード・アーカイブズコースが開設されるとともに、前者の映像情報コースと観光情報コースは文化情報学科、後者の知識コミュニケーションコースとレコード・アーカイブズコースは知識情報学科の2学科にまとめられた。

このとき本学において、観光を教育研究領域とする観光情報コースが誕生したと言える。

1994年文化情報学部観光情報コースの設立メンバーは、青木栄一、大橋泰二および西岡久雄（敬称略　以下同）の3名である。

開設当初より、多くの学生の関心を集め、人気のコースであった。

2. 観光サービスコースへの改編

さらに、2006年においては、大規模なカリキュラム再編が行われた。情報を保存･管理する「ストック系カリキュラム」を文化情報学科にまとめ、さらに、「フロー系カリキュラム」をまとめたメディア情報学科を新設した。

再編された文化情報学科には、観光サービスコース、図書館情報学コース、アート＆アーカイブズコースの3コースが開設され、また、新設のメディア情報学科には、映像音響メディアコース、情報デザインコースの2コースを開設した。

あわせて、従前の観光情報コースは観光サービスコースに再編された。観光の教育研究をより実務に近く位置づけた。

当時、観光サービスコースを担当した教員は、天野宏司、内藤嘉昭、福永昭である。

3. 観光ホスピタリティコースへの発展

さらに、2009年においては、現代文化学部現代文化学科が誕生し、その中に、比較文化コース、観光ホスピタリティコースおよびスポーツ文化コースの3コースが誕生した。

これまでは文化情報学部の一分野として観光サービスコースが位置づけられていたが、このとき現代文化学部における観光ホスピタリティコースとして再編され、今日に至っている。

文化情報学部にては観光を情報と関連づけていたが、現代文化学部においては観光をグローバル化の進展と地域文化の維持発展という観点から捉える

こととなった。

観光ホスピタリティコースは、現在（2011年）、96名の学生を有し、主要な科目としては、観光ホスピタリティ論、観光マーケティング、旅行業法・約款、旅行資源論、JR運賃計算、エコツーリズム実践Ⅱ、接客サービス論、宿泊サービス論、ホテル経営論、テーマパーク論、旅行経営論、観光交通論、観光と情報、国内添乗研修、海外添乗研修、国内観光研修、海外観光研修、観光と文化Ⅰ（ヨーロッパ）、観光と文化Ⅱ（アメリカ）、観光と文化Ⅲ（アジア）、観光と文化Ⅳ（日本）、観光と外国度Ⅰ（多言語）、観光と外国語Ⅱ（英語）、観光と外国語Ⅲ（ドイツ語）、観光と外国語Ⅳ（フランス語）、地域と観光、産業観光論、観光調査法、地域調査実践などが、専攻発展科目として開設されている。

現在、観光ホスピタリティコースを担当している教員は、天野宏司、小林将輝、小林奈穂美、R.Sawazaki、長谷川順一郎、平井純子、福永昭の7名である。

1994年に誕生した観光情報コース（文化情報学部）は2006年に観光サービスコース（文化情報学部）に改編され、また、2009年よりは観光ホスピタリティコース（現代文化学部）として充実発展を続けている。

［注］

1）安澤秀一、原田三朗　『文化情報学』　北樹出版　2002　p.232